

2025年度体験学習プログラム 参加学生レポート集

春期海外スタディツアー・ 海外ワークキャンプ (2026年2月～3月渡航)

NPO法人グッド

認定NPO法人CFFジャパン

NPO法人アクション

認定NPO法人アクセス-共生社会をめざす地球市民の会

公益社団法人アジア協会アジア友の会

『若いうちに視野を広げ、人生を豊かに。』

それが日本を、世界をよくする』

⇒ワークキャンプ等を通して、若者のきっかけ作りを支援している。



●主な活動内容●

- ①井戸掘り、道路作り等のインフラ整備
- ②日韓交流
- ③国内での農業／牧場ワークキャンプ等

☆今回のワークキャンプについて☆

『ジャングルの中の小さな村で心優しい村人たちと過ごす
最高の2週間（スリランカ）』

ポイント

- ①新しい場所で、新しい仲間と協力して作業をする中での人間的な成長
- ②現地の人との農作業や、ホームステイ等、普通の旅行では出来ない体験
- ③各国とのネットワークが充実

○主な活動地域○

スリランカ・タイ・モンゴル
韓国・広島・長野・静岡など



日程	活動	備考
3月5日（木） （1日目）	バンダラナイケ国際空港（CMB） 18:00集合 空港からポロンナルワ市へ移動	バス移動 研修施設 泊
3月6日（金） （2日目）	オリエンテーション	研修施設 泊
3月7日（土） （3日目） ↓ 3月15日（日） （11日目）	村でのスケジュール ・7:00 起床/朝食 ・8:00 ボランティア・ワーク ・12:00～13:00 昼食/休憩 ・16:30 ワーク終了 ホームステイ（水浴び/夕食/就寝）	村での滞在期間中は、 ホームステイ
3月16～17日 （月・火） （12～13日目）	スタディートリップ（遺跡・寺院などの観光地を巡ります） 研修施設で振り返りを行います。	研修施設 泊
3月18日（水） （14日目）	研修施設から空港へ移動 バンダラナイケ国際空港（CMB） 17:00解散	※帰国は翌日の3/19

企画団体名 テーマ (ツアー名)	NPO 法人 グッド スリランカワークキャンプ A 日程
スケジュール	2026年 2月12日(木) ~ 2月25日(水)
ツアー訪問先	国名：スリランカ民主社会主義共和国 地域または島：ポロンナルワ市スーシリガマ村
報告者	国際学部 国際文化学科 2年 小椋 心陽

私は、スリランカのポロンナルワ市スーシリガマ村で行われたワークキャンプに参加した。以前から海外でのボランティア活動に興味があり、現地の人々と関わりながら社会に貢献する経験をしてみたいと考えていた。自分が実際に動いて、人の役に立つことをしてみたかった。また、日本ではあまり馴染みのない国を実際に訪れ、その地域の生活や文化をホームステイで体験出来る点にも魅力を感じた。さらに、この経験を自身の成長や今後の活動にも活かしたいと考え、参加を決めた。本報告書では、活動の内容と其中で得た学びや気づきについて述べる。

本活動は2026年2月12日から2月25日までの約2週間で、参加者は日本人学生を中心に15人、うち1人がスタッフとして活動をサポートしていた。活動内容は、村の生活道路を整備することであり、砂利や砂、水、セメントを、スコップを使って手作業で混ぜてコンクリートを作り、それを道路に流し込むという作業を行った。今回私たちが任された道路は、何度も村の方が修復を試みたが大雨により土がぐちゃぐちゃになり、通行困難になったりけが人が多く出ている道路だとのこと。村の多くの人を使う道であり、今回依頼があった。



砂利とコンクリートと砂を手ごねで混ぜたセメントワーク
全員で協力して完成した道路の写真

研修施設で2日間のオリエンテーションが終わり、ついに村での生活が始まった。村の入り口から見て分かるほどの沢山の人が歓迎してくれ、スリランカの伝統的なダンスや演奏で出迎えてくれた。セレモニーが終わり、そのままホストファミリーの発表があり1日目は終了。次の日から道路作りが始まった。

活動ではまず、道路を作るために道路の幅になる部分を掘り、整える作業から始めた。その後コンクリートを作るのだが、機械で混ぜるのではなくすべて人の手で行う作業だったため、体力を使う大変な

活動であった。混ぜたコンクリートを参加者同士でバケツリレーのように回しながら道路の型に流し込んでいく作業を繰り返し、道路を少しずつ完成させていった。単純で地道な作業ではあったが、日本人だけでなく村の沢山の人が手伝って下さり、道が完成した。



ホストファミリーと記念石碑の前で記念撮影
村人の方々が記念石碑を作って下さった

道路整備という作業は単純で体力の必要な活動であったが、仲間と協力しながら取り組むことで一つの成果を生み出すことができた。道路作りを通して日本人はもちろん、村の人々とも自然と仲良くなれた。村の人々が喜んでいる姿を実際に見て、とてもやりがいを感じた。

このことから、実際に現地の環境で生活するワークキャンプは、SNSや資料では分からない暮らしの現実を実感できること、また、共に作業や生活することで、支援する側という枠を超えた信頼関係を築くことができる。実体験を通じた学びとお互いの良い関係の構築ができる点において、現地で体を動かすことは重要だと考える。

また、現地の文化や生活に沢山触れる事ができ、自分の中でのスリランカという国や人のイメージがガラッと変わり、人生の中でもとても重要な経験になった。現地の家庭でホームステイをして生活をしたのだが、英語があまり通じず自分が覚えていたシンハラ語も多くなかったため、初日はコミュニケーションがうまく取れず戸惑うことも多かった。それでも、ホストファミリーの家族全員がとても親切に接してくれたため、その優しさに何度も助けられた。食事や生活面でも多くの気遣いをしてもらい、不安なく安心して生活することが

できた。

私が当初抱いていたスリランカのイメージは、カレーが有名である国ということや、インフラがあまり整っていないのではないかという漠然とした先入観だった。さらに、国の正確な位置さえ把握しておらず、実際にはほとんど知識のない状態であったが、現地の文化や生活に沢山触れる事で、とてもフレンドリーで心が温かい人々が沢山いる素敵な国だと今は感じている。

企画団体名	NPO 法人 グッド
テーマ (ツアー名)	スリランカワークキャンプ A 日程
スケジュール	2026年2月12日(木)～2月25日(水)
ツアー訪問先	国名：スリランカ民主社会主義共和国 地域または島：ポロンナルワ市スーシリガマ村
報告者	社会学部 社会学科 2年 木下 潤哉

大学2年生が終わろうとしていた10月。振り返ると何もしていない自分に気付いた。サークルも入らず、小さなコミュニティで授業を受ける毎日。このままでいいのかと思っていた時に、龍谷大学ポータルサイトのボランティアでスリランカワークキャンプのページを見つけた。最初は、海外も行ったことのない自分が上手くやって行けるのかという不安もあった。しかし、親の後押しもあり、このキャンプの参加を決意した。

私は、あえてスリランカについての前情報を入れず、自分の中でスリランカという国を膨らませながら飛行機に乗った。約9時間のフライトと5時間のバス移動を経て、村に到着。そこで見た風景は今も忘れない程印象に残っている。



村到着時の写真

到着後は、村の人々が私たちを満面の笑顔で迎え入れてくれた。その後、ホームステイ先の発表があり、私は村長の家に決まり、父、母、弟、妹、妹の5人家族にペットも飼っている家庭だった。日本人一人になり、一気に緊張感が増し、何を話したらいいのか、まず何語で話せばいいのかとパニックになった。家に着いても特にウェルカムムードはなく、家の中の説明をされたが、全く頭に入ってこない。

本当にどうすればいいのか分からない状況が続いた。しかし、その様子を察してくれたのか、すぐに弟が家の周辺の散歩に連れていってくれた。そこで、日本人の友人の協力もあり徐々に緊張もほぐれていった。

その後のワークキャンプは楽しいことばかりだった。ワークでは道路作り。砂や水、セメントを混ぜてそれを道路にしていく作業。単純ではあるが、日本人とスリランカ人が一体となって道路を作り上げていく様に感動した。ワーク中には休憩時間として1日2回のティータイムがあった。その時に、日本人同士で親交を深める人もいれば、スリランカ人と鬼ごっこをして遊ぶ人もいて自由な時間が繰り広げられた。ワークが終わると様々な場所から友達が集まり、ダンスパーティーをする日もあれば、スリランカで有名な遊びをする日もあった。また、クリケットをして汗を流すこともあり毎日が充実した時間であった。

そのような日が続き、村での最終日にはお別れパーティーがあった。スリランカの人々によるダンスが披露され、日本人も劇や歌、ダンスなどを行い、会場は大いに盛り上がった。しかし、パーティーが終盤になるにつれ、別れが現実味を帯びてきて、全員が涙を流す瞬間もあった。

村を離れた後は、日本人との交流。個人戦(話したい相手を指名し、約30分間1対1で互いの感じていることなどを語る活動)をした。また、ミーティングや遊びを通して自分自身を見つめ直す貴重な時間となった。

私は今回のキャンプを、「自分らしさとは何か」を明確にしたいという思いで臨んだ。中学・高校時代では、先頭に立って誰とでも積極的に関わっていた自分が、大学生活の中で少し薄れてきていると感じていた。そのため、改めて自分らしさに向き合いたいと考えたからである。そして今回の経験を通して、私にとっての自分らしさとは、「自ら周囲に働きかけ、人との関わりの中で場を明るくし、関係を築いていく姿勢」であると明確になった。

今回、日本人同士での交流や、スリランカの人々と過ごす時間の中で、自分らしさとは何かを改めて考える機会を得ることができた。また、友人との会話の中で自分の良いところを指摘してもらうこともあり、そ

れが自信へと繋がった。

これから就職活動が始まるが、不安もある一方で、今の自分であればきっと大丈夫だと胸を張って言えるほど成長できたと感じている。



お世話になったホストファミリーと一緒に撮影

最後に今回のキャンプを通して、“人と人との繋がりが”何よりも大切なものだと感じた。2週間という短い期間ではあったが、現在もスリランカの家族と電話をしたり、メッセージを取り合ったりするなど繋がりは消えていない。この決して当たり前では無い繋がりを大切にしながら、これから出会う一人一人との繋がりも大切にしていきたいと考えている。

企画団体名 テーマ (ツアー名)	NPO 法人グッド スリランカワークキャンプ A日程
スケジュール	2026年 2月12日(木)～ 2月25日(水)
ツアー訪問先	国名：スリランカ民主社会主義共和国 地域または島：ポロンナルワ市スーシリガマ村
報告者	先端理工学部 数理・情報科学課程 1年 宮村 昂

私は今回、グッドのスリランカワークキャンプに参加し、本当に多くのことを学びました。今まで日本で生きてきた中で当たり前だと思っていた価値観が覆されるような経験をし、そして何よりスリランカでの生活を心から楽しむことができました。この2週間は私にとって非常に濃く、忘れることのできない時間になりました。

しかし、実は私は最初からこのワークキャンプに前向きだったわけではありません。むしろ参加することにはあまり乗り気ではありませんでした。理由はとても浅はかなもので、せっかくの大学の春休みが半月も減ってしまうのがもったいないと思ってしまっていたからです。そのため大学で行われたワークキャンプの相談会にも参加せず、スリランカには行かないつもりでいました。

そんな時、このことを私がとても尊敬している近所のお母さんに相談しました。すると、その方は学生時代にグッドのワークキャンプに何度か参加したことがあり、「あの経験で人生観が変わった」「今の自分があるのはワークキャンプのおかげだ」と話してくれました。そして「騙されたと思って一回行ってきな」と背中を押してくれました。その言葉がきっかけで、締め切り間近ではありましたが参加を決意しました。参加すると決めてからもなかなか実感が湧かず、「本当に自分はスリランカに行くんだろうか」と何度も自問自答しました。準備にもあまり身が入らず、結局ほとんどの準備を出発の前日にするようになってしまいました。

それでも、実際に行ってみると毎日が新鮮で、本当に濃い2週間が始まりました。まず私は、一緒に参加する日本人のメンバーとも仲良くなりたいと思い、グッドの事務所に前泊させていただくことにしました。そのおかげで事前にキャンパーたちと打ち解けることができ、事務所に住んでいる方々もとても優しく接してくれました。スリランカ経験者の方々から「本当に楽しいよ」と何度も聞き、こんなにも多くの方が口を揃えて楽しかったと言うなら、きっと楽しいのだろうと少しずつワクワクする気持ちも芽生えてきました。

初日はほとんど移動でとても疲れましたが、その時間のおかげでキャンパー同士の距離が縮まり、結果的に良い時間だったと思います。また、私はスリランカについてほとんど下調べをせずに行ったた

め、現地では驚くことがたくさんありました。例えばトイレにトイレットペーパーがないことや、ほとんど毎食カレーであること、そしてそのカレーが想像以上に辛いことなど、日本との違いに強い非日常を感じました。



ホームステイ先の家族との写真

そして、私が何よりも不安に感じていたホームステイが始まりました。しかし、村の人たちは本当に温かく私たちを迎えてくれて、その瞬間に少し安心しました。コミュニケーションの面ではとても心配していましたが、私が滞在した家の子は英語がとても上手で、家族の言葉を英語に訳してくれたため、とても助かりました。日本人がいない環境で何をすればいいのだろうと思っていましたが、家族は私が退屈しないように色々と考えてくれました。日本ではなかなか見ることのできない大自然に連れて行ってくれたり、広大な草原や湖を見せてくれたりしました。そこには牛やクジャク、サルなどの動物が普通にいて、私はとても感動しました。また、近所の人たちが集まってダンスパーティーをしたり、ランプやボードゲームをしました。日本で同じことをしてもここまで楽しいとは思わないかもしれませんが、スリランカの人たちと一緒にやると本当に何もかもが楽しく感じました。正直、私はスリランカの人とここまで仲良くなれるとは思っていませんでした。どこかで日本人とスリランカ人の間には壁があるのではないかと考えていました。しかし実際にはそんなことは全くなく、言葉が完全に通じなくても自然と笑い合い、仲良くなっていくことができました。この経験から、言葉以上に大切なものがあるのだと実感しました。

道路作りのワークでは、途中からセメントを混ぜてバケツに入れ、それをバケツリレーで運ぶ作業を何度も繰り返しました。正直とても大変で、途中でしんどいと感じることもありました。しかしキャンパーやスリランカの人たちが声を出して励まし合いながら頑張っている姿を見ると、自分も頑張らなければと思えました。みんなで協力しながら作業することで、より強い一体感が生まれていたと思います。



みんなで作った道路上で集合写真

一方で、ホームステイ先では少し大変なこともありました。ホームステイ宅の近隣住民と話していると、ホストファミリーに「何を話していたの?」「何かあるなら私に言ってほしい」などと言われてたり、「他の家庭の方がいいのでは」と心配されて、ホストファミリー以外の人と自由に会話しにくいことがありました。しかしそれも、私のことを大切に思ってくれていたからなのだと後から感じました。

お別れパーティーでは、私は場を盛り上げるために身体を張った面白おかしい一芸をすることになりました。最初は少し恥ずかしかったのですが、会場はとても盛り上がり、みんなが笑ってくれたので良い思い出になりました。最後に、日本人で「YELL」という歌を歌いました。言葉は伝わらないはずなのに、私たちの表情や雰囲気から気持ちを感じ取ってくれたのか、会場は少しずつしみりとした空気になっていきました。普段は生意気な態度をとっていた近所のスリランカ人が涙を流しているのを見たとき、私も涙をこらえることができませんでした。

そしてついにお別れの日が来てしまいました。あんなに行くのが嫌だと思っていたはずなのに、帰るときには本当に悲しくて寂しくてたまりませんでした。お別れを言いたかったのに言えなかった人もいます。今思い出しても涙が出そうになります。

この2週間は本当にかげがえのない時間でした。海の向こうの遠い国に、もう一つの故郷ができたような

気がします。私はこの経験を一生忘れないと思います。そして、いつか必ずまたスリランカに帰りたと思っています。

..... [認定NPO法人CFFジャパン]

『子どもたちと一緒にお互いの可能性を伸ばしていきたい。
夢や希望を信じたい。そして心から笑いたい。同じ人間として共に幸せに生きたい。』



⇒国内・海外問わず子どもの未来を築くために活動。それが自身や世界の未来を築くことになる。

●主な活動内容●

- ①海外ボランティアと子ども支援
- ②学校・教育に関する活動
- ③地域（世田谷区）での活動

○主な活動地域○

フィリピン・マレーシア
ミャンマー・東京等



☆今回のスタディツアー／ワークキャンプについて☆

(A) 『フィリピンスタディツアー』

- 現地の家庭でホームステイ。観光旅行ではできない異文化体験。
- 都市スラム、ゴミ集積場...貧困の現実とそこに生きる人たちの生き方に迫る。



(B) 『フィリピンワークキャンプ』

- 児童養護施設「子どもの家」で生活する子どもたちと過ごす日々。
- 100回以上プログラムを実施。人の手で積み重ねられてきた歴史を感じつつ、未来へ繋げるワーク。



(A) フィリピンスタディツアー

日次	地名	スケジュール
2/4 (水)	マニラ	15:30 集合 ★集合場所：マニラ市内「Asilo de San Vicente de Paul」フロント 募集型企画旅行の旅行日程は 15 時 30 分の集合から開始します。 14:00 からホテルにチェックインすることができますので、各自チェックインをし、集合時間までお待ちください。 15:00 までにマニラ空港に到着する航空便をご利用ください。 途中で立ち寄ることなくホテルに移動しチェックインしてください。 【マニラ市内 Asilo de San Vicente de Paul 泊】
2/5 (木)	マニラ スアル	※以下最終日まで移動には専用車を使用 マニラからカバスへ移動 カバス市内戦争跡地、サンタ・バーバラ市内ゴミ集積場を訪問 サンタ・バーバラからパンガシナン州スアル CFF「子どもの家」へ移動 夜：ウェルカムパーティー 【CFF「子どもの家」泊】
2/6 (金)	スアル	セミナー・シェアリング 「子どもの家」内アクティビティ 【CFF「子どもの家」泊】
2/7 (土)	スアル	スアル内教会、スアルマーケット散策 ホームステイ：村の人たちとの交流 【スアル：ホームビジット】
2/8 (日)	スアル	ホームステイ：村の人たちとの交流 公立小学校訪問：生徒との交流 【スアル：ホームビジット】
2/9 (月)	スアル	パンガシナン州スアルからダグーバンへ移動 ダグーバン市内施設訪問 シェアリング 【ダグーバン市内 Lay Formation Center】
2/10 (火)	スアル マニラ	ダグーバン市内施設訪問 リンガエン湾戦争跡地を訪問 シェアリング 【ダグーバン市内 Lay Formation Center】
2/11 (水)	マニラ	ダグーバン貧困地区訪問 ダグーバンからマニラへ移動 シェアリング 【マニラ市内 Asilo de San Vicente de Paul 泊】
2/12 (木)	マニラ	3:30 マニラ市内「Asilo de San Vicente de Paul」にて解散 募集型企画旅行の旅行日程終了

(B) フィリピンワークキャンプ

日次	地名	スケジュール
2/17 (火)	マニラ	15:30 集合 ★集合場所：マニラ市内「Asilo de San Vicente de Paul」フロント 募集型企画旅行の旅行日程は 15 時 30 分の集合から開始します。 14:00 からホテルにチェックインすることができますので、各自チェックインをし、集合時間までお待ちください。 15:00 までにマニラ空港に到着する航空便をご利用ください。 途中で立ち寄ることなくホテルに移動しチェックインしてください。 【マニラ市内 Asilo de San Vicente de Paul 泊】
2/18 (水)	マニラ スアル	※以下最終日まで移動には専用車を使用 マニラからカバスへ移動 ミニ・スタディツアー（カバス市内、サンタ・バーバラ市内） サンタ・バーバラからパンガシナン州スアル CFF「子どもの家」へ移動 夜：ウェルカムパーティー 【CFF「子どもの家」泊】
2/19 (木)	スアル	ワークキャンプ セミナー 【CFF「子どもの家」泊】
2/20 (金)	スアル	ワークキャンプ セミナー 【CFF「子どもの家」泊】
2/21 (土)	スアル	ワークキャンプ セミナー 【CFF「子どもの家」泊】
2/22 (日)	スアル	ワークキャンプ セミナー 【CFF「子どもの家」泊】
2/23 (月)	スアル	ワークキャンプ セミナー 【CFF「子どもの家」泊】
2/24 (火)	スアル	ワークキャンプ セミナー 【CFF「子どもの家」泊】
2/25 (水)	スアル	ワークキャンプ セミナー 【CFF「子どもの家」泊】
2/26 (木)	スアル	パンガシナン州スアルからカリカーンへ移動 カリカーン貧困地区訪問 カリカーンからマニラへ移動 【マニラ市内 Asilo de San Vicente de Paul 泊】
2/27 (金)	マニラ	3:30 マニラ市内「Asilo de San Vicente de Paul」にて解散 募集型企画旅行の旅行日程終了

※3/16(月)～3/26(木)もスケジュールは同じ

企画団体名 テーマ（ツアー名）	認定 NPO 法人 CFF ジャパン 第 133 回フィリピンワークキャンプ
スケジュール	2026 年 2 月 17 日（火）～ 2 月 27 日（金）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：パンガシナン州・スアル
報告者	国際学部 国際文化学科 1 年 富岡 優衣

大学に入学してから、特に何かに打ち込みたいという実感がないまま時間だけが過ぎていき、このままではいけないという焦りのような気持ちがずっとあった。そんな時に偶然見つけたのがフィリピンのワークキャンプだった。軽い気持ちと海外への憧れで参加を決めたはずなのに、実際に過ごした 10 日間は想像以上に濃く、今でも胸の奥に残っている。

このフィリピンワークキャンプでは、現地の子どもの家へ続く道がとても狭くて危険だったため、その問題を解決するために、現地の青年キャンパーと協力し、道幅を広げる作業を行った。

ワークではリーダーを務めたため英語でのコミュニケーションが必須だったが、暑さと疲労で自分のことで手一杯になり、作業指示どころか相手の言葉を理解し、話すことにも苦労した。リーダーとしての役割を果たせていないという焦りが積み重なり、ワーク前半は気が重い状態が続いた。

そんな私を救ってくれたのが、毎晩行われるセミナーの時間だった。セミナーでは日によってテーマや問いが違い、毎回違う角度から自分と向き合うきっかけをくれた。何日か続くうちに、参加者同士の距離も少しずつ近づいていった。

そしてある日の問いは「今何を感じているか」だった。私は思い切って弱音を口にした。「リーダーなのに何もできていない。英語も思うように話せないし、みんなに迷惑をかけている気がする」と。すると仲間たちはすぐに「ゆいはちゃんと頑張ってるよ」「大丈夫、「みんなでやればいいんだよ」と声をかけてくれた。その瞬間、張りつめていたものがほどけて涙が出た。弱さを見せても受け止めてもらえるという経験は、私にとって大きかった。



グループ（まっしぐら MIX）の仲間

セミナーでは自分の意見を英語で伝えるだけでなく、仲間の考えを聞くことで、自分では思いつかなかった視点に何度も出会った。価値観の違う人たちが同じテーマについて語ると、同じ出来事でもこんなに受け取り方が違うのかと驚かされた。

宿泊場所は「子どもの家」という児童養護施設で、毎朝のモーニングディボーションも印象に残っている。聖書の一節を読み、静かに祈る時間。高校でもキリスト教を学んでいたが、当時はどこか他人事だった。しかし今回は、現地の人たちと一緒に祈る中で、言葉が以前より自然に心に入ってきた。

子どもの家のスタッフの中には、日本の植民地支配の話が家族から聞いて育った人がいた。ある日本人キャンパーが、「日本に対して嫌なイメージはありますか」と尋ねた。するとその人は「最初はあるよ。でも今は許せている。聖書に“敵を許しなさい”と書いてあるでしょう。神様が言っていることが大事だから」と静かに答えた。その言葉を聞いた時、胸が熱くなった。歴史の痛みを抱えながらも、信仰を通して相手を許すという姿勢に深い尊敬を覚えた。



記念碑の前での集合写真

フィリピンで過ごした日々は、私に「行動することの意味」と「人と向き合う勇気」を教えてくれた。この経験を胸に、これからの大学生活でも自分から動き、学び続けていきたいと思う。

企画団体名 テーマ（ツアー名）	認定NPO 法人 CFF ジャパン 第134回フィリピンワークキャンプ
スケジュール	2026年3月16日（月）～ 3月26日（木）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：パンガシナン州
報告者	国際学部 国際文化学科 1年 滝田 紗千

私は3月16日から26日の11日間、CFFという団体が主催するフィリピンでのワークキャンプに参加した。参加した動機は、長い春休みに留学の代わりになる体験をしたいという思いからだった。公用語が英語であり英語の練習ができること、参加費用や実施期間を考慮し、海があるということで、このフィリピンワークキャンプに参加することに決めた。

1日目は移動と参加者同士でのアイスブレイク、そしてショッピングセンターにて夕食。

2日目は、第二次世界大戦で使われていた収容所、慰霊碑を訪れ歴史学習。学校の授業では習ったことのないことを知ることができた。午後には国営のゴミ処理場に行き、フィリピンにおけるゴミのコンポスト事情やゴミ拾いによって生計を立てている方の話を聞いた。その後、「子供の家」というCFFが運営する児童養護施設に到着し、ウェルカムパーティーで子供たちと現地の高校生キャンパーと初めて対面した。彼らはフィリピンの伝統的な踊りや流行りのダンスを見せてくれ、私たちも日本の音楽や踊りの発表を行った。

3日目、いよいよワークが始まった。私が参加した134回のワークキャンプでは、施設内の道路を作った。地面を堀削し、セメントを粉から混ぜ、子供たちが安全に生活できるよう整備した。



バケツリレーでセメントを運んでいるワークの様子

4日目～9日目、ワークは続いた。気候も穏やかで、ビーチに行ったり、ピースセミナーで戦争当時の話を聞く日もあり、多角的な体験ができた。午後はゆったりとできる時間が多く、午後4時にはワークが終わるので、子供たちとバスケットやバドミントンを楽しんだり、現地のキャンパーとダンスをしたり、充実した

時間を過ごすことができた。ワークについては、1日中ずっと肉体労働をするわけではなく、疲れても仲間と協力するから頑張れるし、盛り上げ上手のフィリピン人が楽しませてくれるので、ワーク最終日の9日目にはこのワークがもう終わってしまうのかと寂しい気持ちになった。その夜はフェアエルパーティーで歌い、話し、笑い合いながら豪華な食卓を囲み、別れを惜しんだ。こんなに平和な世界があるのか、と涙がこぼれてきた。

10日目は、マニラ空港近くのホテルに戻り、少し周辺を観光して、振り返りとして最後のミーティングを行った。



夕食の時間に子どもと

毎日4時に起きて、掃除をしてから一日を始めるんだって！

今回のワークキャンプで、私は「人は生かし、生かされている」ということを強く感じた。ワーク期間中、毎日朝と夜にアクティビティなどを通して自分や周りの環境を見つめなおす時間があったのだが、他人がいるからこそ、自分は今、命を輝かせることができるのだと改めて感じた。

また、参加前と参加後では価値観が大きく変わった。参加前は貧困で困っている人々や様々なバックグラウンドを持つ子供たちを助けに行くぞ、と意気込んでいたのだが、実際にフィリピンに行って感じたことは、そのような境遇にある人たちに対して「可哀想だ」と思うことは失礼だということだ。

彼らは全員が口をそろえて、「たくさん問題はあるけど毎日がとても幸せだ」と言っていて、今を全力で生きている。もう充分幸せで、次は誰かに幸せを分けてあげられる人になりたいと思う自分に気づき、そんな気持ちが世界を平和にすると学んだワークキャンプだった。

企画団体名 テーマ（ツアー名）	認定NPO法人CFFジャパン 第42回フィリピンスタディーツアー
スケジュール	2026年2月4日（水）～ 2月12日（木）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：ルソン島
報告者	国際学部 グローバルスタディーズ学科 1年 石堂 杏奈

本プログラムに参加した目的は、主に二点ある。第一に、教科書やメディアを通じて得た知識が、実際の現場でどのように具現化されているのかを自らの五感で確かめること、第二に、異文化との接触を通じて、自身の関心を明確にし、今後の就職活動に向けた指針を得ることである。

マニラに到着して真っ先に目に飛び込んできたのは、複雑に絡み合う電線や街を包む埃っぽさであり、日本とは異なる環境に身を置いたことを痛感した。しかしその一方で、KFCやセブンイレブンといった日本でも馴染みのある店舗が点在しており、グローバル化による既視感と開発途上国特有の熱気が混在する光景に、不思議な感覚を覚えた。



スマルの町並み

本ツアーで最も深く印象に残ったのは、人々が持つエネルギーである。公立小学校の訪問や「CFFの家」での滞在を通じ、多くの子どもたちと交流した。彼らは常にアクティブで笑顔を絶やさず、集団に埋没することなく「個」として主体的に行動する逞しさを持っていた。

特筆すべきは、彼らの精神的支柱にキリスト教の教えが深く根付いている点である。起床時や毎食前の祈り、身に付けられた十字架だ。心の強さの源を尋ねると、誰もが「神様」と答えた。この揺るぎない信仰心が、過酷な環境下でも他者へ心を開く強さを生んでいるのだと実感した。また、共に参加したメンバーからも大きな刺激を受けた。体調不良を乗り越えプログラムに復帰する精神力や、自らの夢を語る熱意に触れ、私自身も自己のあり方を見つめ直す機会を得た。

移動中のアクシデントにより浜辺で待機していた際、現地の子どもたちから物乞いを受けた。当初、私はいかにトラブルに巻き込まれるのではないかと考慮し彼らを見向きもせず無視していた。しかし、彼らの人懐っこさに触れるうちに、最終的には共に鬼ごっこをして遊ぶこととなった。この経験を通じ、私は自分の中に潜む偏見を自覚した。彼らをひと括りに「物乞い＝貧しい対象、警戒すべき対象」と定義し、その背景にある個々の物語を想像しようともせず、無意識にラベルを貼っていたことに恐怖を覚えた。自身の視点がいかに表層的であったかを思い知らされた瞬間であった。

フィリピンの人々の笑顔についても、私は「貧しさゆえの防衛策」ではないかと推測していた。しかし、現地女性（アテ）の「笑顔は相手を笑顔にし、自分をも幸せにするもの」という言葉を聞き、認識が改まった。笑顔は生き抜くための術である以上に、人生を主体的に豊かにするためのものであった。一方で、17歳前後から家計のために働きに出る若者が多いという現実にも直面した。教育を受け、同世代との関わりの中で精神的に成熟すべき時期に労働を余儀なくされる構造的課題に対し、今後より専門的な知識を深め、



自分に何ができるのかを追究していきたい。

ホームステイ最終日にとった写真

本ツアーを通じて、人間が持つ純粋なエネルギーを肌で感じることができた。現地で学んだ「他者と関わり、状況を前向きに捉える力」を、帰国後の日本での生活や今後の就職活動において、具体的なアクションとして反映させていきたいと考えている。

『生まれた環境に関わらず、世界の子ども達が
自分のチカラで夢や可能性を広げることができる、やさしい社会をつくる』



⇒どんな環境で生きていても、こども達一人ひとりが、持つ力を発揮し、夢にむかって、おもいきりチャレンジできる世界を。

●主な活動内容●

フィリピン

- ①職業訓練・教育・ケア活動
- ②児童養護施設職員教育
- ③性教育プロジェクト等

日本

- ①学習支援
- ②国際理解教育等

○主な活動地域○

フィリピン・日本



☆今回のスタディツアーについて☆

『フィリピンの児童養護施設に住み込み！

教育ボランティアツアー』

ポイント

- ①児童養護施設と公立小学校で**日本語教室**
- ②貧困地域の子ども達に**青空教室**
- ③**児童養護施設**の屋根建設ボランティア
- ④ごみ拾いで生計を立てる人々が暮らす**貧困地域**で**家庭訪問**

日付	旅程/プログラム	宿泊地
2/12 (木)	12:50 羽田空港集合/15:20 羽田空港発 19:50 マニラ空港着/専用車でサンパレス州の児童養護施設へ移動	マニラ 児童養護施設泊
2/13 (金)	午前：オリエンテーション（施設長からのお話、滞在中注意事項、施設説明など） 午後：オリエンテーション、青空教室の準備・こども達と一緒に夕食	児童養護施設泊
2/14 (土)	終日：こども達と遠足（※プールなど）	児童養護施設泊
2/15 (日)	午前：炊き出し・青空教室準備 午後：貧困地域訪問炊き出し・青空教室実施	児童養護施設泊
2/16 (月)	午前：ソーシャルワーカーからのレクチャー 午後：日本語教室準備	児童養護施設泊
2/17 (火)	午前：屋根建設ボランティアワーク 午後：日本語教室準備	児童養護施設泊
2/18 (水)	午前：屋根建設ボランティアワーク 午後：日本語教室準備、さよならパーティー準備 夕方：児童養護施設で日本語教室	児童養護施設泊
2/19 (木)	終日：自由行動	児童養護施設泊
2/20 (金)	午前：公立小学校訪問（授業・給食支援現場見学） 午後：小学校で日本語教室、さよならパーティー準備	児童養護施設泊
2/21 (土)	午前：ブードルファイト準備/日本語教室準備 昼食：こども達とブードルファイト（フィリピン伝統の食事スタイル） 午後：こども達との交流/日本語教室実施	児童養護施設泊
2/22 (日)	午前：ツアーの振り返り 午後：児童養護施設でさよならパーティ実施	児童養護施設泊
2/23 (月)	午前：マニラへ移動・観光 午後：ホテルチェックイン/ショッピングモールで自由時間	ホテル泊
2/24 (火)	朝：マニラ空港へ移動、帰国 9:10 マニラ空港発/14:10 羽田空港着	—

企画団体名 テーマ（ツアー名）	NPO 法人 アクション フィリピンの児童養護施設に住み込み！教育ボランティアツアー
スケジュール	2026年 2月12日（木）～ 2月24日（火）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：サンホセ
報告者	社会学部 現代福祉学科 2年 松尾 成美

本ツアーには、現地での生活や人々との関わりを通して社会福祉について学びたいという思いから参加した。私が今回学びたかった社会福祉とは、貧困や教育格差といった問題を制度や数字として捉えるだけでなく、その中で暮らす人々一人ひとりの生活背景や思いに目を向け、安心して生きていけるよう支える営みである。日本で生活していると、貧困や教育格差については授業や報道を通して知識として学ぶことはできるものの、それらはあくまで数字や制度の説明にとどまり、実際の暮らしや感情までは十分に想像できていなかった。そこで私は、児童養護施設に住み込みながら活動し、現地の人々と生活を共にしつつ話を聞き、体験することで、支援の現場を自分の目で見て、肌で感じたいと考え、本ツアーに参加した。

現地では、児童養護施設を拠点に教育支援や生活支援に関わった。施設には約20人の子どもたちと、ハウスペアレントやソーシャルワーカーが共に生活している。特に印象に残っているのは、学校から帰宅した後の子どもたちの様子である。バレーボールやバスケットボールなどの遊びを思いきり楽しみ、空手の稽古にも真剣に取り組む姿に加え、畑作業や家事にも率先して向き合う姿からは、子どもたちのエネルギーと主体性が感じられた。そのような日々を当たり前のように積み重ねる姿勢には、思わず頭が下がる思いがした。

また小学校を訪問した際には、コロナ禍以降、保護者の失職や低所得化が進み、経済的に厳しい状況に置かれている家庭が多いという現状を知った。こうした背景のもと、学校では、栄養価の高い給食を無償で提供し、生徒の体重や健康状態の改善を目的とした給食支援が行われていた。

しかし、この支援はBMI基準を下回る子どもに限定されており、限られた資源の中で支援の対象や優先順位を決めざるを得ない厳しさも感じた。数値上は貧困ラインに該当しなくても、十分な栄養が保障されているとは限らないという事実は、貧困を単純な基準で捉えることの危うさを示していることを学んだ。

フィリピンでは物価が日本より低い一方で収入水準も低く、家庭環境や地域差によって生活状況は大きく異なっている。特に、学歴の有無によって就労機会が大きく左右され、小学校卒業や大学進学が叶わない場合、将来の選択肢が著しく限られてしまう

現実がある。こうした状況は、統計や数値だけでは捉えきれない、人々の生活の重みを強く感じさせるものであった。



貧困地域で青空教室を実施し、折り紙をした様子

一方で、私が現地で最も心を動かされたのは、児童養護施設の子どもの姿であった。出発前、私は「貧困」という言葉から暗く厳しい生活を想像していたが、実際に出会った子どもたちは明るく、互いに声をかけ合いながら生活し、私たちにも積極的に関わってくれた。言葉が十分に通じない中でも、身振り手振りを使って意思を伝えようとする姿が印象的であり、その姿勢に何度も助けられた。私はこれまで「持っていないもの」に目を向けがちであったが、彼らは「今ある関係」や「共に過ごす時間」に価値を見いだしているように感じられた。

しかし同時に、子どもたちが笑顔で過ごしているからといって、課題が存在しないわけではないとも感じた。施設で出会った子どもたちの中には、孤児や虐待、育児放棄、貧困など、さまざまな背景を抱えている子どもも多く、将来の進学や就労の選択肢が限られている可能性や家庭環境に起因する困難など、表面から見えにくい問題が確かに存在している。だからこそ、「貧困でも幸せである」と単純に結論づけることはできない。今回の経験を通して、私は物事を安易に理解したつもりになるのではなく、その背景の複雑さを含めて受け止める姿勢の重要性を学んだ。

本ツアーは、私にとって支援の意味を問い直す機会となった。支援とは、不足しているものを一方的に補うことではなく、さまざまな背景を抱える当事者一人ひとりの歩んできた過程や思いを尊重しながら、共に



児童養護施設で日本語教室を実施し、
日本語の自己紹介カードを作っている様子

考えていく営みである。今後は、社会課題を学ぶ際にも、数字や制度の背後にある人々の生活や経験に目を向けることを意識し、相手の立場に立って考え続ける姿勢を大切にしていきたい。

..... [認定NPO法人アクセスー共生社会をめざす地球市民の会]

『子どもに教育、女性に仕事を』

access

⇒貧しい人々の生活状態を改善すると同時に、人々自身が貧困から抜け出すための問題解決能力を身につけられるよう支援を行っている。

●主な活動内容●

- ①子ども教育支援事業
- ②フェアトレード事業
(女性や若者の就労支援)
- ③日本での啓発活動

○主な活動地域○
フィリピン・日本



☆今回のスタディツアーについて☆

『フィリピンスタディツアー

飛び込もう。「途上国」のリアルを体験する旅へ

』ポイント

- ①じっくりお話「家庭訪問&インタビュー」
- ②NGO活動を垣間見る
- ③戦後を生き抜いた人々の声を聴く



プログラム

1日
目 出発 オリエンテーション

2日
目 都市スラム コミュニティ見学、地域の子どもたちと交流、家庭訪問インタビュー、感想シェア

3日
目 農漁村 バレーズ地区へ移動、オリエンテーション、海辺の宿舎でのんびり、感想シェア

4日
目 農漁村 グループでの家庭訪問インタビューで住民の声を聴く、村で子どもたちとの交流会、ホームステイ

5日
目 農漁村 コミュニティツアー、住民のライフストーリーを聴く、感想シェア

6日
目 移動日 マニラへ移動、戦争についてのオリエンテーション

7日
目 歴史と戦争 戦跡訪問（サンチャゴ要塞）、太平洋戦争のお話、ディスカッション、ショッピングモールで買い物

8日
目 帰国

企画団体名 テーマ（ツアー名）	認定NPO 法人アクセス—共生社会をめざす地球市民の会 フィリピンスタディツアー
スケジュール	2026年 3月4日（水）～ 3月11日（水）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：マニラ、トンド地区、ペレーズ島
報告者	国際学部 国際文化学科 1年 大杉 優奈

このフィリピンスタディツアーは、人とのつながりの大切さや、貧困に対する自分の価値観を見つめなおす大きなきっかけとなった。もともと国際協力や国際問題について関心があり、実際に現地を訪れて自分の目で社会の現状を学び、自分の耳で現地の人々の話を聞きたい、という思いから参加を決意した。しかし、出発前の私は、フィリピンの貧困に対して「生活が大変そう」「可哀そう」といったネガティブなイメージを持っていた。しかし、ツアーを通して貧困とは何かを考えさせられた。

現地では、スラム地域の訪問や住民の方々との交流、ホームステイなど多様な活動を経験した。その中で、特に印象に残っているのは、スラム街に住む人とその生活である。スラム街を訪れた際、まず感じたのは自分の想像を超える生活環境への衝撃だった。限られた資源の中で生活する様子を目の当たりにした。しかし、実際にそこで生活する人と関わる中で、その印象は大きく変わった。子供たちは無邪気に笑い、手を振ると笑顔で手を振り返してくれた。大人たちも温かく迎えてくれ、地域全体が明るい雰囲気であったのが印象的だった。暮らしは決して豊かとは言えない環境であっても、人と人とのつながりや日々の小さな幸せを大切にしている様子が伝わってきた。



スラムでの出会い

さらに、プログラム中には参加者同士で「貧困とは何か」というテーマについて参加者と意見交換を行う機会があった。統計的な数値や収入の状況だけ見れば、

厳しい生活環境にあるといえるかもしれない。しかし、実際に出会った人々は明るく前向きであり、お互いに助け合いながら日々を過ごしていた。その姿に触れる中で、私は「可哀そう」という見方そのものが、自分の知識不足や固定概念から生まれたものであったのではないかと考えるようになった。この気づきは、異文化を理解する上で先入観を持たずに、現地の人々の立場に立って物事を捉える姿勢の重要性を学ぶきっかけとなった。

また、ツアーを通して自分の小さな行動が遠くの場所で大きな影響を与えていることを改めて知った。これまで参加した、アクセスの検品ボランティアの活動が現地の人々の生活に確かに繋がっていることを知り、自分の行動に誇りを持つようになった。



ホームステイ先の子どもとお絵描き

これらの経験から、社会問題に対して主体的に関わることの意義についても理解を深めることができた。自分一人の力は小さいかもしれないが、ボランティア活動への参加や多くの人との協働によって社会に変化をもたらすことができるということに気づき、今後の自分の行動や活動についても考えるようになった。

今回のツアーを通して、自分自身が無意識に「貧しい＝不幸」という一方的な見方をしていたことに気づいた。実際にはどのような環境であっても、そこには笑顔が存在しており、自分の価値観の狭さを実感した。本当の豊かさとは何か考え直すきっかけとなった。

今後は、今回の学びを経験で終わらせるのではなく、ボランティア活動や国際問題との関わりを通して継続的に社会課題に向き合っていきたいと考えている。また、異なる文化や価値観を尊重しながら人との出会いを大切に、自分にできる行動を積み重ねていきたい。

企画団体名 テーマ（ツアー名）	認定NPO 法人アクセス-共生社会をめざす地球市民の会 フィリピンスタディツアー
スケジュール	2026年 3月4日（水）～ 3月11日（水）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：マニラ、トンド地区、ペレーズ島
報告者	文学部 英語英米文学学科 3年 伊藤 大和

今回のフィリピンスタディツアーにおいて、私が最も印象に残ったのは、サンチャゴ要塞の見学と現地の子どもたちとの交流である。この二つの経験を通して、歴史と現在のつながり、そして自分自身の在り方について深く考えることができた。

まず、マニラにあるサンチャゴ要塞を訪れた際、フィリピンがスペインによる植民地支配を受けていた歴史を実感した。要塞の分厚い石壁や高い構造は、防衛のために築かれたものであり、当時の緊張感や支配体制の厳しさを感じさせた。特にこの場所は、フィリピンの英雄ホセ・リサルが処刑前に収容されていた場所であり、単なる歴史的建造物ではなく、人々の自由や独立への想いが刻まれた象徴的な場所であると理解した。教科書で学ぶだけでは得られない「実感」として歴史を捉えることができた点は、大きな学びであった。

また、現在のサンチャゴ要塞は観光地として整備され、多くの人々が訪れている。しかし、その美しい景観の裏には植民地支配という苦しい歴史が存在している。このように、目に見えるものだけでなく、その背景にある歴史や文脈を理解することの重要性を感じた。歴史は過去の出来事ではなく、現在の社会や人々の価値観にもつながっているものであると実感した。



スペイン統治時代に築かれたサンチャゴ要塞の石造建築

一方で、現地の子どもたちとの交流は、今回のツアーの中でも特に心に残る経験であった。最初は言語の違いや文化の違いから不安もあったが、子どもたちはすぐに笑顔で接してくれ、自然と打ち解けることができた。英語が完璧に話せなくても、ジェスチャーや表

情、そして「関わりたい」という気持ちがあれば、十分に心は通じ合うということを実感した。彼らの明るさや純粋さはとても印象的であり、短い時間であっても強い絆のようなものを感じた。

そして、別れの時、私は思わず涙を流してしまった。自分でも驚くほど感情があふれ、この出会いがいかにか自分にとって大きなものであったかを実感した。それまでの私は、どこか大学生生活を「なんとなく」過ごしていた部分があった。しかし、この経験を通して、人と真剣に関わることや、目の前の出来事に全力で向き合うことの大切さに気づくことができた。

さらに、現地の生活環境を目にする中で、日本との違いについても強く考えさせられた。決して裕福とは言えない環境の中でも、子どもたちは笑顔を絶やさず、日々を楽しんでいる様子が印象的だった。この経験から、物質的な豊かさだけでなく、人とのつながりや心の豊かさが幸福に大きく関わっているのではないかと考えるようになった。同時に、自分が当たり前のように過ごしている日常が、実はとても恵まれたものであることにも気づき、感謝の気持ちを持つようになった。



ペレーズで出会った子供たち

今回のスタディツアーは、単なる海外体験ではなく、自分の価値観や生き方を見つめ直すきっかけとなった。サンチャゴ要塞で感じた歴史の重みと、子どもたちとの交流で感じた人の温かさは、どちらもフィリピンという国を理解する上で欠かせないものである。この経験を今後の大学生活や将来に活かし、「なんとなく」ではなく、自分の意思を持って行動できる人間へと成長していきたい。

『水支援から地域を支え、貧困をなくす』

⇒水支援から地域の課題を解決して貧困をなくすために活動しているNGO



●主な活動内容●

- ①教育や生活の支援・環境保全
- ②緊急災害復興支援
- ③国際交流イベントの開催
- ④国内での啓発・教育活動



○主な活動地域○

インド・インドネシア・カンボジア
スリランカ・ネパール・ミャンマーなど
アジア18か国



☆今回のスタディツアーについて☆

『インドネシアの教育と環境を実感するスタディツアー』

ポイント

- ①経済発展途上の実情を、**教育と環境の観点**から見て学び考える
- ②国の今後の成長を支える**インドネシア大学生や子どもたちと交流**
- ③**ジャワ島とバリ島**で、街も自然豊かな村も海も山も訪れる
- ④**環境改善**のための現地の活動に参加



日付	旅程/プログラム	宿泊地
2/12 (木)	夜:ジャカルタ、スカルノ・ハッタ国際空港ターミナル3の両替所前に集合 → 南タンゲラン市のひかりスクールへ移動	学校教室 ジャワ島
2/13 (金)	・子どもと交流プログラム ・学校周辺の住まいやゴミ山を見学、子どもたちとクリーン活動、子どもへの環境啓発 ・現地大学生との交流、地域課題に挑戦するミニプロジェクト始動	学校教室 ジャワ島
2/14 (土)	・現地の先生や保護者とインドネシア&日本料理の交流クッキング ・子ども向け学外教育事業の日本人経営者から、インドネシアでの起業についてお話 ・ジャカルタ観光	学校教室 ジャワ島
2/15 (日)	<午後、飛行機でジャカルタ→バリへ> ・ホテルに移動 ・街を散策	ホテル バリ島
2/16 (月)	・マングローブ林で植林、カヌーに乗ってクリーン活動 ・ディアナプラ大学キャンパスで大学生と交流・意見交換 ・ごみ処理パイロット&環境教育施設の見学	ホテル バリ島
2/17 (火)	・サンゴ礁保全センター見学 ・ビーチ遊びとビーチクリーン ・山間農村の小学校を訪問・交流、クリーン活動、環境啓発	ホテル バリ島
2/18 (水)	・棚田の村のお宅で暮らし拝見、トレッキング ・観光 (ヒンドゥー寺院、タナロット、ケチャ鑑賞)	ホテル バリ島
2/19 (木)	朝:ホテルにて解散	-

企画団体名 テーマ（ツアー名）	公益社団法人アジア協会アジア友の会（JAFS） インドネシアの教育と環境を実感するスタディツアー
スケジュール	2026年 2月12日（木）～ 2月19日（木）
ツアー訪問先	国名：インドネシア共和国 地域または島：ジャワ島、バリ島
報告者	農学部 食料農業システム学科 2年 藤田 朔

今回のスタディツアーでは、初日は関西空港からマレーシア経由でジャカルタのクアラランプール空港までのフライトでした。私自身初めての海外で、関西空港からマレーシアまではなんとかたどり着けたのですが、マレーシア空港から館内アナウンスも全て英語だったため、身振り手振りのボディランゲージを使って乗り継ぎまで繋ごうと思ったものの、中々上手くいかず海外渡航の洗礼を受けました。そこで同じツアーの大西さんという人をたまたま見かけて一緒に行動するようになり、なんとかマレーシアからジャカルタまでの飛行機へ乗ることができました。勇気を持って声をかけること、そこで出来た人とのつながりは改めて素晴らしいなと感じました。

初日からバリ島までの期間は空港から車で1時間ほどのヒカリスクールという施設へ泊まりました。ヒカリスクールはかつて日本へ留学してきた創設者の方が、日本の教育や礼儀作法を母国に持ち帰り、そこで勉強してもらおうという動きからできた学校です。そこでは、インドネシアで恐らくヒカリスクールだけの「掃除の時間」があります。これは我々が日本の学校で普通にやっていた掃除の時間でしたが、環境教育の一環としてこの時間を設けているとおっしゃっていました。

2日目は朝から学校周りのゴミ拾いを行い、ゴミがかなり落ちていたり、川の水も汚れていてインドネシアの環境問題の深刻さを改めて感じました。落ちているゴミはプラスチックや食べ物の箱が多く、ゴミを分別することやゴミ箱へ捨てる文化がそもそもなく、日本との文化の違いを感じました。

ゴミ拾いが終わると、大縄跳びやハンカチ落としなど日本の遊びを通じて子供達と触れ合う時間がありました。現地の子供達は日本のアニメがかなり好きな印象があり、有名なアニメだと大体の話は通じていました。

交流が終わると、各班にわかれて日本人グループが各々作成した環境教育指導の時間でした。私はコンポストをテーマに、実際に子供達と一緒にコンポストを作ったり、クイズなどを通してコンポストについて知ってもらうことをねらいとした授業をしました。インドネシアでは、コンポストは土と生ごみさえあれば植物の肥料になる（＝ゴミを肥料に変える）画期的な方法ですが、生ごみ以外のゴミもかなり存在します。インドネシアの未来を変えていく為にも、ゴミの分別や

コンポストなどの小さなことを子供たちに伝えていくことが大切だなと感じました。



現地の小学生たちと一緒にコンポストを作っている様子

また子供達の授業を見学する時間では、インドネシアの小学1年生は英語のレベルが我々が小学校一年生の時より遥かに高いなと感じました。また子供達一人一人が授業に積極的に参加をしていて、挙手や発表などをどんどんとしている印象でした。しかし、数学の時間を見ると、4年生のクラスでもいまだに割り算や小さい数の掛け算など数学の教育はかなり遅れているなと感じました。



4年生の数学の授業の様子
タブレット端末を使って問題を解いています

また、後からツアーの方に聞いた話では、日本ではクラスに1人か2人は不登校になる人がいるのに、インドネシアでは学校に1人いるかいないかのことです。我々は学べる環境が当たり前があるので、どうしても気が進まないことがあると学校へ行かないという選択肢もありますが、彼らは「行ける学校なら」「学べるなら」と、不十分な環境でも学びに進む姿勢は日本の学生たちにも伝えていくべきだなと感じました。

企画団体名 テーマ（ツアー名）	公益社団法人アジア協会アジア友の会（JAFS） インドネシアの教育と環境を実感するスタディーツアー
スケジュール	2026年2月12日（木）～ 2月19日（木）
ツアー訪問先	国名：インドネシア共和国 地域または島：ジャワ島・バリ島
報告者	政策学部 政策学科 2年 谷岡 頼明

今回のインドネシアスタディーツアーは、私にとって自分の「当たり前」を問い直す経験となった。事前学習で環境や教育について知識として学んではいたが、実際に現地を訪れ、自分の目で見て、匂いを感じ、人と対話することで、初めて本当の意味で理解できたと感じている。

特に印象に残っているのは、朝のビーチクリーン活動である。湾の中心にあたる場所ということもあり、日本の漂着ごみが多い海岸とは比べものにならないほど大量のプラスチックごみがあった。数メートル進むだけで袋がいっぱいになり、正直終わりが見えないと感じた。さらに、ジャカルタの川に流れたごみが海へ出て、バリのビーチ、そして世界中の海へと広がっていくと知り、ごみ問題は決して一国だけの問題ではないと強く実感した。しかし一方で、ほうきを使って日常的に掃除している現地の人の姿もあり、決して無関心なのではないと知った。活動後には「ありがとう」と日本語で声をかけてくれる人も多く、お互いが気持ちよくなれる時間だったと感じている。ビーチが想像以上に長く、歩くだけでとても疲れたことも今では良い思い出である。



南タンゲランのゴミ山を見学

ゴミ山も衝撃的だった。焼却されることなく積み上がるごみを目の前にし、初めて「ごみを捨てること」に罪悪感を感じるようになった。一方で、現地には前向きな取り組みもあった。ごみ銀行では、分別したプラスチックを持っていくことでお金に換える仕組みがあり、バリでは生ごみをコンポスト化する活動も進められていた。ゴミ山ではあえてハエを増やし、生ごみをウジ虫に分解させ、そのウジ虫を鶏の餌にすると

いう循環もあると知った。単に「遅れている」と捉えるのではなく、その土地なりの工夫や背景を理解することが大切だと感じた。

教育現場も印象的であった。ヒカリスクールでは教室に二種類のゴミ箱が設置され、子どもたちは分別を学んでいる。現状では政府が最終的にまとめて回収してしまうこともあるが、「今の子どもたちに教育を行い、将来システム自体を変えていく」という考えを聞き、世代を超えた取り組みの重要性を学んだ。授業では数学を競争形式で行い、子どもたちは積極的に手を挙げ、元気に参加していた。英語力は高く、iPadも活用されている。経済的に裕福とは言えない環境でも、学校では皆が楽しそうに笑っており、幸福度は必ずしもお金に比例しないと感じた。

ペサギ州立小学校での活動も忘れられない。木を植える体験やコンポストづくりも行い、子どもたちがすぐに実践してくれた姿を見て、確かな手応えを感じた。また成長した木を見に来たいと心から思った。最初は「大人はなかなか変わらないのではないかと感じていたが、目の前の子どもたちは意欲にあふれており、未来への可能性を強く感じた。



ヒカリスクールで日本語を学んでいる小学生と自分

市場では観光では決して入らないような場所を訪れ、現地の生活を垣間見ることができた。棚田の景色はこれまで見たことのないもので、森の奥を眺めたときにはまるで別の世界に入り込んだような感覚になった。タナロット寺院の壮大な風景も印象的であった。

この七日間は驚くほどあっという間だった。多くの大人の方々の支えがあってこの経験ができたことに感謝している。そしてインドネシアに新しいつながりができたことは、私にとって大きな財産である。帰国後はこの経験を友人にも伝え、自分自身の行動も少しずつ変えていきたい。今回の学びを一過性のものにせず、これからの生活の中に活かしていきたいと思う。

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：<https://www.ryukoku.ac.jp/npo/>
E-mail: ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-2047 Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL：077-544-7252 Fax:077-544-7261